



究極の選択

ミルクティー

究極の選択

「金と愛、あなたならどちらを選ぶ？」

そう訊かれた。

「愛かな」

と、すぐさま俺は答えた。

途端に罵倒する声が俺に襲い掛かる。

「何言ってるの、馬鹿じゃない?! 今時、金より愛が大事なんて言うやつあんたくらいのもんだよ。愛は金で買えるの! 金さえあれば、誰でも愛してくれるわよ」

目を三角にした友人が、怖い顔をして俺を睨んできた。

自分から二者択一を迫ってきたくせに、俺が彼女とは違った意見だということでこうも罵倒されるものだろうか……。

俺は少し首をすくめて彼女に目を向けた。

彼女の言い分を否定するつもりはさらさらない。

それでも俺はやはり愛が必要だと思うのだ。

「いや……でも本当の愛は金では買えないんじゃないかな」

「本当の愛って、だから何?!」

声のレベルが一段と上がった。

なんだかやばい感じだ。

怒りがびりびりと伝わってくる。

「いや……だからさ、その人のためなら何でもしてあげたいと感じる無償の愛のことじゃないかな」

「アガペーってやつね。辞書で調べたことあるわ。『相手の応答や、感謝すら期待しない無償の愛』だって。いやだ!! すごい、いかにも偽善的~。ものごとギヴアンドテイクよ。あなた、こういう無償の愛だとか何だとか言ってるから駄目なのよ」

「愛がギヴアンドテイクになるわけ？」

俺が呆れて訊ねると彼女は頷いた。

「そうよ。あたりまえじゃない。彼は私をこれだけ愛してくれた。だから私も彼と同じ分だけ彼を愛す。兩人とも同じだけ互いを愛せば、差し引きゼロ。損得勘定は同じっていう寸法よ」

「……………」

なんだか彼女の考え方はものすごい。

反論することより、そういう思考をもっていたんだという事実に感心してしまう。

「でもさ、間壁。お前テレビでこの前放送していたドラマを見て泣いてたじゃないか。そのことはどう説明するのさ」

感動の最終回だ。

お互い愛していながら気持ちのすれ違いばかりを繰り返した主人公たちが、やっと二人での一歩

を踏み出す、というものだ。

「あはは。あんた何言ってるの。ドラマと現実は違うわよ。所詮ドラマは作り上げられた虚構の世界なの。現実では、そううまくはいかないわよ」

馬鹿じゃないの、と駄目押しされて俺は虚しくなってきた。

少年少女たちがこれを聞けば、一気に希望をなくすに違いない。

『夢と希望と愛』、正義の味方やヒーローたちのセリフには、ほとんど愛という言葉が使われる。愛よりも金のほうが大事だなんて、ヒーローたちよりもむしろ悪者が言いそうな言葉だ。

「それじゃあ、君はたくさんお金を出すから結婚してくれと言われたら結婚するわけだ」
彼女は少し考える素振りをした。

「そうね。したいと言いたいところだけど、やっぱりいくらお金を出されても束縛されるのはごめんだわ。年が離れすぎているのもいやだな」

・・・結局それって単にわがままだけじゃないか？

「俺は本気で愛した人なら、収入とか身分とか年齢とかは関係ないと思うんだけど」
世の中には、十歳離れた夫婦だっている。

最近では同性の夫婦だって認められてきているくらいなのだから。

「ふうん。じゃああんた本気で愛した人がいるの？」

「.....いないけど」

言葉を濁した俺を鼻で笑って、彼女は馬鹿にしたように笑った。

「なによ、そんなことじゃ何もわかるわけじゃないじゃない。愛かお金か、訊ねたところであなたにわかる訳なかったのね」

冷たい視線を俺に降り注いだ後、彼女は「ああ、馬鹿らしい」と言いながら、読んでいた雑誌を放り出した。

手にとって見ると、なるほど。

小さな投書の欄に『あなたはお金と愛情、どちらをとりますか？』という文章が掲載されている。きっと、彼女はこの記事に触発されたのだろう。

「もしかして、この記事を見て君はそんなこと急に言い出したの？」

「そうだけど・・・」

彼女は少し照れたように髪を弄り、上目遣いで僕を睨み上げた。

「なんか文句ある？」

「ありはしないけど」

投書に寄せられる文はさまざまだ。

でもそれは送った本人が感じたことで、僕たちがそう思う必要はどこにもない。

むしろ、そっくり同じ意見であれば気味が悪いほどである。

「どう感じるかは、人によって違うのね」

そう言って彼女は大きな伸びをした。

「それなら、俺がどう感じたっていいはずだよ」

整った彼女の横顔を見ながら訊ねると、彼女は軽く肩をすくめてみせた。

「まあね」

大して興味もなさそうだ。

そんな彼女の横顔を見ているうちに、俺は小さな賭けを思いついた。

大したことじゃないけれど、俺にとってマイナスにはならないはずだ。

「あのさ、そういえば君は彼氏がいないって言ってたよね」

少しむっとした表情を向ける彼女に満足感を覚えた俺は、心の中で少しだけ笑った。

「愛を知らない君が、愛よりも金が大事と言い切れるのが僕は不思議だね。もちろん僕もそれを言えた義理じゃないことは重々承知だけど。だからさ・・・」

僕は彼女の顔を見据えた。

「僕と付き合わない？愛を知らないもの同士。そりゃ僕は金持ちとは言えない。でも日々をそれなりに暮らしていただくだけのお金はある。君に、世の中が金だけじゃないことを教えてあげたいんだ。どうだい？」

「きざったらし～」

眉間にしわを寄せた彼女は、それでもなかなかはっきりした返事を返さない。

それどころか、彼女はだんまりを決め込んでいるようにも思えた。

すぐにつき返されるかと思っていた僕は、その反応に少し驚いた。

彼女にとって金が一番だと思った。

だからこの収入の少ない僕では、彼女の眼鏡に合うはずがないと。

「少し考えさせて」

まぶたを閉じて、彼女は先ほどまで一度も手を付けていなかったドリンクに手をつけた。

水滴のたくさんついた清涼飲料水のカップ。

ストローをのぼっていく液体は淡いオレンジ色。

なんとなく希望を感じさせる色だ。

「十二分に考えてくれよ」

俺はそう言って、彼女に見えないように小さくこぶしを握り締めた。